

隨筆集

坂道と雲と

正秋



隨筆集 坂道と雲と

昭和四十七年十一月三十日 初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川源義

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三・郵便番号一〇二
振替東京一九五二〇八 電話(03)二六五―七一―

印 刷 暁印刷株式会社

製 本 宮田製本所

定 価 六百九十円



落丁・乱丁本はお取り替えます

随筆集・坂道と雲とⅡ 目次

I

寒椿―三島由紀夫の死―

川端文学のエロティシズム

中世への回帰

世阿弥の教養

伝説の終焉

道綱の母―『かげろふの日記』の作者―

物語の裏にある生臭さ―『今昔物語』―

正徹と子規

現代にとって文学とは何か（1・2）

作庭記―私の発想の一部として―

旅のあと

ふたりの新人

一編集者との出逢い

二 六 四 三 二 一 〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一

最も影響を受けた小説
初版本のこと

II

坂道と雲と

顔

旅の名残り

木綿の匂

躁と鬱

今年の秋

化粧坂

日曜日

女のうしろ姿

海岸街の小さな店で

坂道

五人の女

三
三

九

九

四

八

三

七

二

六

二

二

五

九

さまざまな姿態

二三

若い夫婦像

二六

死者の顔

二〇

きものの匂

二四

結城つむぎ

二四

上布の肌ざわり

二七

風土について

二〇

久留米絨

二四

泥大島

二七

木綿のなつかしさ

二五

III

富士山

二七

幻の杏子の花

二六

大分の旅

二二

岬の体験

二六

能登の旅

一七

萩・長門の旅

一七

伊賀の番傘

一八

日本三景について

一八

風土とはなにか

一九

IV

日本の酒

二〇

秋の酒

二〇

食べものの話

二〇

V

春から夏に

二五

山房の山萩など

二五

柿と椋鳥

二七

一重と八重	二六九
掘られた山椒の木	二七〇
わが作庭の記	二七三
非合理的な家	二七六
新築後一年のことなど	二七八
消えて行く上布	二八四
日常のなかの着物	二八五
着物のうしろ姿	二八七
東ヶ谷日記	二八八
昼時の蕎麦屋	二八八
四十二通の履歴書	二九一
読者の風姿	二九三
消えて行く黒髪	二九六
履歴書後日譚	二九八
蕎麦屋後日譚	三〇一
美しい女	三〇四

秘めた多言

三〇五

逆説の幸福

三〇八

私の好きなことば

三二

あとがき

三三

(発表誌紙一覽)

三五

装帧·插画
堀
文子

I



寒 椿

——三島由紀夫の死——

植木屋が、こんな庭では正月を迎えられませんね、と丈二メートル前後の寒椿、山茶花、木犀、要綱を運んできて、垣根がわりにびっしり植えてくれた。七月にここに越してきてから、どんな庭にするか、ああでもないこうでもない、と思いつめぐらしているうちに冬を迎えてしまったので、見るに見かねた植木屋が、荒涼とした庭に緑を添えてくれたのである。かりに石と砂だけの無機的な庭にしたとき、朝夕それを眺めて耐えられるだろうか、といった思いが、作庭をおくらせたのであった。

鈍い午後の陽ざしのなかを、寒椿の花弁が散って行く。「あれは散るのぢやない、散らしてゐるのだ、一とひら一とひらと散らすのに、屹度順序も速度も決めてゐるに違ひない」こんな名言がおもいうかんできたのは、やはりあの事件のためだった。見ていると、首ごとぼとつと落ちて

行く棒もあった。要するにあの純粹な魂が帰結する場所は自殺しかなかったにせよ、目前で散っている棒はやはり痛ましかった。

いつ頃からか私はその人にある親近感を抱いていた。たぶん、それは、その人が、剣を習いだした時分ではなかったかと思う。私は剣を捨てて久しいが、剣とはなにか、これについては少しばかり識っていたので、親近感を抱いたのはその所為^{せい}であった。

だが、死者を語るのは、なんと難しいことだろう。もうすこし月日が経てば語れるかもわからない。それより、十一月二十五日に書いた一文をここに再録してみよう。そうすれば、そこらなにかを引きだせるかもわからない。

——私は三つの新聞社からの電話で、三島由紀夫氏の自殺を知らされた。文藝春秋の大河原氏からも電話があり、立原さんの予言通りになりましたね、と言われた。なんの感動もなかった。二年半ほど前、私は大河原氏に、三島氏の割腹自殺を予言したことがあった。楯^{たて}の会が世間に宣伝されはじめたときには、ああ、この青年達を道づれにするつもりだな、と言ったこともあった。三島氏は、私にとっては常に最高の見物対象であった。それはまことに見物に耐え得る見事な才能であった。つくられたものの美もあそこまで到達できたら、これはもう天才としか言いようがない。しかし、あまりにも脆弱^{ぜいじやく}すぎる武であった。おのれの脆弱さをいちばんよく知っていたのは三島氏自身であった。彼はそれにうち克つために剣をやり、ボデービルをやり、空手をやり、楯の会をこしらえていた。そうしたかたちを見世物にしようとしたとき、私は、無理につくりあげ

た武には限度がある、限度にきたとき、彼は自決するだろう、と考えたのである。こと剣に関するかぎり、これは自明の理である。

去年、「小説新潮」の編集部から、グラビヤに三島氏と剣の同好の士で出てくれないか、と言われたことがあった。私は、しばらく考え、見世物でない三本勝負をするなら、と答えたが、これは実現しなかった。三島氏の返事は、俺はいま空手に全身全霊をうちこんでいるから、ということだったらしい。中央公論社の笹原氏は、三島氏に剣の手ほどきをした人だが、あるとき笹原氏から、雑誌のグラビヤから三島さんとの立ちあいを申し入れられてもやらん方がいいよ、と言われたことがあった。私は「小説新潮」から言われたとき、ことわるべきだったかも知れない。

このときの私の心境は、いまここに述べるのをはぶくが、三島氏は、はじめから終りまで、演技に徹した生涯（しやうかい）であった。しかし、三島氏は、なぜ自宅で割腹しなかったのか。まことの剣を知っていたのなら、法を紊みだすことはしなかったろうし、ましてや青年を道づれになど出来るはずがない。最後まで演技によって自己顯示をしなければ気のすまない人だったのだろう。もし独りで割腹自殺をしていたのなら、三島美学は、はじめもよく終りもよかった。しかし三島氏にしてみれば、自分を介錯してくれる人が必要だったのかも知れない。切腹にはどうしても介錯が必要だった。私にはそのように思える。しかし、いずれにせよ、これは三島氏の独創であり、余人がまねられる世界ではない。

これは「読売新聞」日曜版に書いた随筆のなかの一節である。笹原金次郎氏は私の早稲田の先

輩である。笹原氏から言われたのは、四十一年の暮だったか四十二年の春だった。笹原氏の真意は、つまりその人は陽のあたる場所を歩かねば気のすまない人だから、おまえが本気でうちすえては困る、ということであった。私はそのとき氏の意を諒りようとした。それから昭和四十四年の暮まで、私はその人とのグラビヤをことわりつづけてきた。私は観客に徹していた。それが「小説新潮」の求めに応じたのは、たまたま私が鬱うつの情態にあったからにほかならない。笹原氏の忠告を忘れたわけではなかったのに、あのとき私がなぜ大人気おとなげないことを考えたのか、いまとなってみるといささかの後悔が残る。

その人がボデービルをやりはじめたとき、私はすこぶる興味をおぼえた。文士のボデービル、という風に私は受けとったのである。そして剣をやりだしたときにも同じ感じを受けた。私はジャン・コクトーやサン・テクジュペリを考えたのである。ちかくは石原慎太郎氏のヨットを考えたのである。

ここまではよかった。やがてその人はボデービルと剣を見世物にしはじめたのである。そのときになって私はその人が剣を習いはじめた動機に疑問を抱くようになった。ボデービルや空手のことは私にはわからない。剣を見世物にしはじめたとき、私は、いやなことをする、と嫌悪感があった。私の親近感にはわかに冷静な観客の眼にかわった。文士の余技としてグラビヤにとられるとしても、これは、マスコミの発達した当世ではある程度はやむをえないことである。しかし剣を見世物にするようでは……私はやっとその人が実生活を仮構化していることに気づいた。剣を仮構化の道具につかっていたのである。同時にその人は剣を自分の修辭学のなかに包みこんで